

# 教職に関する科目「教育原理」の 効果的な教授に向けた一考察

— 学生用図書にみる教育の歴史的記述の内容分析を通じて —

市田 敏之

藤本 駿 (東亜大学人間科学部)

藤村 祐子 (広島大学大学院教育学研究科・日本学術振興会特別研究員)

坂本 泰雅 (広島大学大学院教育学研究科)

小早川倫美 (広島大学大学院教育学研究科)

## 1. は じ め に

本稿は、教職に関する科目「教育原理」で使用される学生用図書の記述内容を分析することを通じて、当該科目を教授する際の留意点を指摘することを目的とする。

近年、学校教育に関して多くの課題が指摘されるが、その中でも教員の資質や能力の保障に関する議論は最も重要ものの一つといえる。実際、1997年に教員養成審議会が『新たな時代に向けた教員養成の改善方策について』を答申して以来、養成・採用・研修の各段階において教員の資質や能力の保障に関する多くの施策が講じられてきた。このうち、養成段階では教育職員免許法及び関連法規により開設科目等の基準が定められ、その基準の範囲内で各養成機関において具体的教育が展開されている。本稿の関心である「教育原理」も養成機関によっては科目名称に相違があるものの、後述の通り教育職員免許法等に位置付くもので、その講義の内容は法令で示される内容を基準としながらも各養成機関で多様な講義が展開されていることが予想される。

そこで本稿では、教職課程における効果的な教授法を開発することを目的とする研究の一環として、「教育原理」で使用される学生用図書の歴史的事項に

関する記述内容を分析することを通じて、当該科目を教授する際の留意点を指摘する。また、学生用図書の記述内容の分析に先立ち、近年求められる教員像と教職課程における「教育原理」の位置づけも確認する。

本稿に特に関連する先行研究としては、中嶋他（2004）によるものを挙げる事ができる。本先行研究は、「教育原理」で用いられる学生用図書の記述内容の分析を通じて、その教授内容や方法の開発を目的とする点において本稿と研究の目的・方法を同じくしており、本稿執筆にあたっても大変参考となった。しかしながら、本先行研究の分析の対象は教育思想に関する記述内容とされており、本稿が試みる歴史的事項に関する記述内容についての分析は行われていない。したがって、本稿は中嶋他の研究の後続として位置づける事ができる。

なお、本稿において分析の対象とした「教育原理」に関する学生用図書は文末に示した15点である。なお、これらは、書名に「教育原理」や「教育学概論」およびそれらに類する語が用いられている平成17年から平成22年の間に出版された図書を入手したうえで、教職課程の学生用図書として用いられていると執筆者らが判断したものを選定し、分析対象とした。

（市田敏之）

## 2. 近年求められる教員像と教職課程における「教育原理」の位置づけ

### 2.1 近年求められる教員像

教員の資質能力についてはこれまでも多くの答申等で検討されてきた。1997年の教育職員養成審議会第一次答申『新たな時代に向けた教員養成の改善方策について』においては、①いつの時代にも求められる資質能力、②今後特に求められる資質能力、③得意分野を持つ個性豊かな教員という3つの側面から検討され、その中で、教員の資質能力は、「専門的職業である『教職』に対する愛着、誇り、一体感に支えられた知識、技能等の総体」とであるとされた。また、2005年の中央教育審議会答申『新しい時代の義務教育を創造する』では、優れた教師の条件として、①教職に対する強い情熱、②教育の専門家としての確かな力量、③総合的な人間力という3つの要素が示された。こうした教員の資質能力に対する基本的な捉え方は、2006年の中央教育審議会答申『今後の教員養

成・免許制度の在り方について』においても「今後とも尊重していくことが適切である」と言及されているように、今後の教員像を考えていく上で重要な意味を持つと考えられる。

また、上述した教養審第一次答申では、大学の教職課程は、教員として最低限の資質能力を身につけさせる段階であるとし、最低限の資質能力を「教職課程の個々の科目の履修により修得した専門的な知識・技能を基に、教員としての使命感や責任感、教育的愛情等を持って、学級や教科を担当しつつ、教科指導、生徒指導等の職務を著しい支障が生じることなく実践できる資質能力」とした。つまり、大学の養成段階では実践的指導力の基礎に重点を置き、採用後の研修において実践的指導力の向上を図ることを示した。さらに、「最近までの諸施策の展開は次第に、『大学における教員養成』段階から実践的指導力そのものの育成を求めている」（土屋2007）という指摘があるように、実践的指導力を重視する方向が強まっている。

## 2.2 教職課程における「教育原理」の位置づけ

教育職員免許法第3条において、「教育職員は、この法律により授与する各相当の免許状を有する者でなければならない」と規定するように、教員になろうとする者は免許状を取得しなければならない。中学校教諭一種免許状の取得を例にすれば、学士の学位を有することを基礎資格とし、大学で「教科に関する科目」20単位、「教職に関する科目」31単位、「教科又は教職に関する科目」8単位をそれぞれ修得することが求められている（教育職員免許法別表第一）。

「教職に関する科目」31単位は、教育職員免許法施行規則第6条の教職に関する科目の単位の修得方法として示された表によると、「教職の意義等に関する科目」2単位、「教育の基礎理論に関する科目」6単位、「教育課程及び指導法に関する科目」12単位、「生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目」4単位、「教育実習」5単位、「教育実践演習」2単位で構成されている。本稿で取り上げる「教育原理」は、「教育の基礎理論に関する科目」の一つとして設けられる授業科目である。

「教育の基礎理論に関する科目」の最低修得単位数は6単位であるが、この

科目に含めることが必要な事項として、「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」、「幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程（障害のある幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程を含む.）」、「教育に関する社会的、制度的又は経営的事項」の3つの事項が示されており、それぞれ2単位ずつ配分されるのが一般的である。「教育原理」は、「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」に相当する科目として2単位を修得することが求められる。

以上のように、「教育原理」は、教員志望の学生に対し、教育に関する基礎的、理論的な内容にかかる知識や技能を教授する授業科目であるが、実践的指導力の基礎を強固にすることが求められているという近年の状況を踏まえれば、「教育原理」という授業を通して、教育に対する適切な理解を深めることができますと期待されているといえる。

（藤本 駿）

### 3. 「教育原理」学生用図書にみる歴史的記述の分析

#### 3.1 学校教育成立以前の教育に関する歴史的記述

本稿の分析の対象とした15点の学生用図書のうち、本節の分析の観点である学校教育成立以前の教育に関する歴史的記述がみられたものは12点であった。そのうち10点の学生用図書が教育目的を各時代思想家の思想内容と関連付けて論じており、その大半が古代ギリシア時代と中世ヨーロッパの2つの時代を取り上げていた。

古代ギリシア時代の取り上げられ方は概ね以下の通りである。すなわち、古代ギリシアにおける教育の最終目的はポリスの一員としての市民の育成にあった。しかし、ペルシア戦争以後、急速な経済発展をとげたギリシアでは、従来の国家への奉仕から個人の自由や発展といった要求に応じた教育ニーズが高まり始めた。そこでこれらの教育ニーズに対応する形で現れたのがソフィストと呼ばれる職業教師であった。彼らは読み書きや弁証能力を教えることにより報酬を得ていたが、ソフィストによる教授活動においては文法や修辞学といった形式的学習が重視されるようになった。この状況に異論を唱えたのがソクラテスである。ソクラテスは、ソフィストがおこなっていた知識についての定義を

与える教授を批判し、それに替わって質問を通して相手の無知を自覚させる（無知の知）ことによって自らを考えさせ思考力を呼び起こす教授を展開した。また、ソクラテスの弟子であるプラトンは理想国家と個性的個人とを両立させ、教育目的の国家的立場と個人的立場の統一を試みた。そしてプラトンの弟子であるアリストテレスは、ギリシア教育の伝統であった「自由教育」の理念と意義を強調した。

一方、中世ヨーロッパを取り上げる際の記述内容は概ね以下の通りである。すなわち、中世ヨーロッパではキリスト教の布教により教育の目的がキリスト教を中心とするものであった。修道院学校は7世紀から教会に関わる僧侶を育てる学校として、最も重要な学校であった。修道院学校は、計算や読み書き等が初歩的なものとして教えられ、その後、上級段階に進むと「自由七科」と呼ばれる科目を学習することになった。自由七科は、文法、修辞、論理学という三学と、算術、幾何、天文学、音楽という四科に分けられた。これらの上に哲学が位置しており、中でも神学は最高の学問として位置づけられていた。その後、14世紀から16世紀にかけて、ルネサンスの運動が展開されることとなった。ここでは、教会の支配から人間を解放し、古代ギリシアやローマの「自由教育」を復興させ、個人の人格を調和的に発展させる人文主義教育が展開されることとなった。

（坂本泰雅）

### 3.2 欧米の学校教育に関する歴史的記述

本稿で取り上げた学生用図書のうち欧米の学校教育に関する歴史的内容を取り上げたものは8点であった。さらに、これらを詳細に分析すると、欧米の学校教育の歴史に「制度的側面」からアプローチしたものと「思想的側面」からアプローチしたものとは大別できる。

制度的側面からアプローチした学生用図書の多くでは、「学校制度と教育行政」や「学校制度」、あるいは「教育制度」に関する章節の中で概ね次のように近代以降の欧米の学校教育の歴史が取り上げられている。そこでは、学校教育の始まりを国民教育制度の構築と捉え、近代社会を迎えた欧米諸国が国民す

べてを対象とした教育の体系的な制度化を図ったものとして記述されている。例えば、教師養成研究会（2009）にみられる「近代社会の幕開けは国民一般を対象にした学校制度誕生の曙でもあった」や「『学校』という機関が、社会の制度として整備され始める歴史の始まりでもあった」との記述はその典型といえる。同様に、田原他（2008）も「今日のような全国民を対象にした学校制度が成立するのは、19世紀後半のことである。近代国家の形成と発展の過程で、初等教育の充実が求められるようになり、19世紀の末までには、ヨーロッパ各国で国民教育の組織化が進められ、全国的な規模での義務教育制度が採用ないし強化されていった。こうして、学校制度は、近代公教育の場として整備され、著しく発展することになった」と記述し、学校教育の始まりを国民教育制度の構築として捉えている。

また、欧米の学校教育の歴史を解説するにあたり学校体系を「複線型」「単線型」「分岐型」の3類型によって（教師養成研究会2009）、もしくは、「下構型学校系統」と「上構型学校系統」の2類型によって（田代・佐々木2010）、それを学校体系の歴史的類型として解説する学生用図書も見られる。いずれの場合も、ヨーロッパにおける学校教育の発展と階層の関連が解説されている。このように、学校体系によって欧米の学校教育の歴史を解説する際も、国民教育制度の発展という観点から記述がなされている。

次に、思想的側面からのアプローチでは次のような特徴がみられる。すなわち、「なぜ、いつごろから学校が必要とされるようになったのか」また、「このような学校がどのように発展し、今の学校になったのか」という問いに対して、社会状況を背景とするなかでいかなる思想家が学校教育の目的や方法を構想したのかとの観点からの解説である。たとえば、田嶋他（2009）では、産業革命のもとで旧来の共同体による人間形成に変容が生じたことや普遍的知識・技術としての科学が重視されるようになったことを挙げている。また、同書では市民革命による近代公教育の成立背景も解説しており、そこではコメニウスやルソー、ペスタロッチの教育思想が影響を与えたことが概説されている。

（藤村祐子）

### 3.3 我が国の学校教育に関する歴史的記述

本稿で分析した学生用図書において、我が国の学校教育に関する歴史的記述は、概ね「近代教育制度の成立」、「戦前の教育制度の展開」、「戦後の教育改革」といった時期に区分したうえでそれぞれの時期の学校教育の特質を解説するものとなっている。

一般的に、我が国の近代教育制度の端緒は1872年の「学制」の発布によると理解される場合が多いが、本稿の調査でも対象とした15点の学生用図書のうち12点で「学制」が取り上げられていた。例えば佐藤他（2008）は、学制により単線型学校系統や中央集権的行政組織が志向されたこと、あるいは、学制下における小・中学校の教育内容の特質を解説している。また、牛渡（2008）は、学制を個人主義的な立場に立つ教育目的を持ち、知識の開発を通して近代的市民の資質形成を目指す近代公教育思想を有するものであったと捉えたうえで、その背景にはフルベッキやマーレー、福沢諭吉の思想的影響があったことを示している。

また、複数の学生用図書において1886年の学校令の公布前後の時期で近代教育制度の成立期と展開期とを区分している。ただし、学校令や教育勅語に代表される明治後期の学校教育を取り上げる文脈は、例えば大浦（2009）のようにそれらを国家主義的教育理念として捉えるものもあれば、佐藤他（2008）のように国民教育の確立と整備として記述するものもみられる。しかしながらその後の学校教育の展開を取り上げる文脈はそれを取り上げる多くの学生用図書において共通点がみられる。すなわち、大正期の学校教育については、大正デモクラシーの風潮の中で比較的自由な教育が展開されたことが記述され、その後の昭和初期の学校教育については国民学校の成立等を事例としながら、戦時体制下の教育という文脈で解説される。また、この時期の学校教育を解説するにあたり、学校系統図を提示する学生用図書も複数見上げられる。学校系統図の提示は、戦後の学校教育改革と併せて提示されることも特徴として指摘できる。

戦後の教育改革は、第二次大戦後の戦後教育改革期とその後の新たな教育制度を概観したものが多い。これらは戦前と戦後の教育制度を対比的に捉えてその相違点に着目する傾向にあり、どちらかといえばその連続性に着目して記述



するものは少ない傾向がある。また、現代の教育課題に対する諸改革に言及し、教育の機会均等々に代表される戦後教育改革の理念を現代的な文脈の中で記述するものも見うけられた（南新他2009）。

（小早川倫美）

#### 4. お わ り に

本稿で取り上げた学生用図書の全てに歴史的事項に関する記述が見られた。これは教育職員免許法ならびに同施行規則に従った結果でもあろうが、同時に、教員志望の学生が教育に関する基礎的・理論的な知識を習得する際に、その歴史を学ぶことが必須であると認識されているということでもあろう。ただし、学生用図書における歴史的内容の取り上げられ方を検討すると、多様な取り上げられ方がなされていることが分かる。特に学校教育成立以前の歴史を記述する際には、特定の教育活動や出来事を教育史の中に位置づけるというよりも、教育思想の変遷として取り上げられることが多い。勿論、教育思想の学習と教育史の学習とを全くの別のものとして捉えることが困難であることは自明であるが、「教育原理」の講義において学校教育成立以前の教育の歴史を講じる際には、教育の思想面のみならず、それぞれの時代で社会のいかなる部分が教育的機能を担っていたのか等、教育の実態やその歴史的な文脈にも着目した授業展開が肝要となるであろう。

また、欧米の学校教育に関する歴史的記述と我が国の学校教育に関する歴史的記述を比較した場合、次の特徴を指摘することができる。すなわち、本稿で分析した学生用図書の中で欧米の学校教育の歴史は制度的側面と思想的側面の両面から記述されたものが多いのに対して、我が国の学校教育の歴史を記述する中で思想的側面にまで言及したものは少数であった。本稿では、学制やその後の学校教育の展開における思想を取り上げた学生用図書を例示したものの、調査対象とした学生用図書の全般からみれば、その記述は欧米のそれと比較して少ない傾向がみられた。「教育原理」において学校教育の歴史を講じる際、学生に対して学校系統図等を提示しながらその制度の変遷を確認させ、それぞれの時代での実態や意義、学校の果たした役割等を制度的側面から解説するこ



とは極めて重要であろう。しかしながら、それと同時に、学校が出現した背景や期待された役割等を思想的側面から解説することもまた重要となり得る。したがって、講義担当者は、我が国の学校教育の歴史について講じる際にも、制度的側面のみならず思想的な背景やあるいは社会的な背景を視野に入れて講義を展開することが期待されよう。

最後に、近年重視される実践的指導力を有した教員の養成を念頭に置いた場合、「教育原理」において学生が教育の歴史的事象を学ぶにあたっては、それを特定の歴史的文脈の中の特定の事象として理解すると同時に、現代との関連性や類似性を認識することがより有意義であると考えられる。したがって、講義担当者は、教育に関するそれぞれの歴史的事象を講じる際、学生が現代的教育課題との関連性や類似性を意識化できるように留意する必要があるように思われる。

(藤本 駿)

#### 【分析対象図書】

- 今津孝次郎・馬越徹・早川操編(2005)『新しい教育の原理』名古屋大学出版会  
牛渡淳(2008)『改訂 教育学原論』中央法規  
大浦猛編(2009)『最新改訂版 教育原理』山文社  
教師養成研究会編著(2009)『教育原理 十訂版』学芸図書  
熊谷一乗編著(2009)『新・人間性と教育—教育学概論 第三版』学文社  
佐藤晴雄(2008)『現代教育概論〔第2次改訂版〕』学陽書房  
佐藤尚子・景山礼子・飯嶋香織・蔭山雅博・佐藤由美・國枝マリ・二見剛史  
(2008)『初めて学ぶ教育の原理』学文社  
柴田義松・山崎準二編(2009)『教育原論 第二版』学文社  
田井康雄・中戸義雄共編(2008)『探求・教育原論—人間形成の解明と広がり—』  
学術図書  
田嶋一・中野新之祐・福田須美子・狩野浩二(2007)『やさしい教育原理〔新版〕』有斐閣  
田代直人・佐々木司編著(2010)『新しい教育の原理—現代教育学への招待—』

ミネルヴァ書房

田原恭藏・林勲編（2008）『教育概論〔4訂版〕』法律文化社

沼野一男・松本憲・田中克佳・白石克己・米山光儀（2010）『教育の原理〔第四版〕』学文社

南新秀一・佐々木英一・吉岡真佐樹編著（2009）『新・教育学〔第2版〕』ミネ  
ルヴァ書房

山崎英則編著（2006）『新・教育原理』ミネルヴァ書房

### 【参考文献】

土屋基規（2007）「各国における教師の資質向上策（8）日本」吉岡正樹（研究  
代表者）『教師教育の質的向上策とその評価に関する国際比較研究』科学  
研究費補助金成果報告書.

中嶋一恵，三山緑，住岡敏弘，高瀬淳，市田敏之（2004）「教職に関する科目  
『教育原理』における教育内容・方法の開発にむけた一考察—教員の実践  
的指導力を培う教育思想の授業を目指して—」『長崎女子短期大学紀要』  
第28号，101-105頁.